鏡よ鏡

市立釧路総合病院　形成外科
林　　翔平

1990年、北海道千歳市生まれ。旭川医科大学を卒業後、札幌にて初期研修を行い、現在形成外科の専攻医２年目。専門医取得目指して日々奮闘中。もともと音楽が趣味で、働き始めてからはアコーディオンを始めました。
※「ボタン式」アコーディオン。右手でメロディ、左手の120個のボタンで伴奏ができます。

北海道医療センターの森永千尋先生からバトンを渡していただきました。５月号の水戸先生、６月号の竹内先生、７月号の森永先生とは大学時代からの友人で、共に国家試験を乗り切った戦友でもあります。今でも一年に数回は顔を合わせて近況報告していますし、また診療で行き詰まった時にはお互いの専門知識をシェアし合いながら助け合っています。

私は北海道大学形成外科の専攻医で、今年７月から市立釧路総合病院で研修をしています。医師としては５年目ですが専攻医２年目で、１年間まわり道をしています。一度専攻を決めましたが、とある体験がきっかけとなり形成外科に転科しました。

私は顎変形症で大学６年生から歯列矯正を開始し、医師２年目の夏休みを利用して手術を受けました。いわゆる受け口で左右も非対称なことがどうしても気になっていました。写真に写るのも避けていましたが、それにもだんだん嫌気がさして来て「思い切って治してしまおう」と思ったのが治療を始めたきっかけです。術後は原型が分からなくなるほど顔が腫れますが、数ヵ月経過して腫れが引いていきます。すると不思議なもので、カメラに対する嫌悪感が無くなり、他人の視線が気にならないので、人とのコミュニケーションにも知らず知らずのうちに積極的になっていました。周りの人の反応はさまざまで「顔、変わったね」という人もいますが「え？そもそも受け口だったっけ？」という人もいました。

人は誰しもコンプレックスを持っていると思います。しかしそれは他人にとっては取るに足らない、気づいてもいないことかもしれません。また「これも自分の個性かな」と前向きに捉えられる人もいます。ただ中にはそれが病的に気になりすぎて、対人関係など日常生活に支障をきたしている人がいるのも事実です。私は専門を選ぶ時に形成外科も候補にあったのですが、その一分野である美容医療に当時あまり良いイメージを持てず、悩んだ末に選択肢から外しました。しかし、いざ自分がその患者になってみると違った景色が見えました。「コンプレックスを取り除いてその先の数十年を前向きに生きたい」と決めた人のお手伝いをすることも、素晴らしいことだと思えるようになりました。

左から水戸先生、竹内先生、森永先生、私です。

私はつい先日まで青森のとある病院で研修していました。そこでは保険診療に加えて自費診療も積極的に行っており、特にシミに対するレーザー治療は盛んに行われていました。外来で患者さんをフォローしていると、シミ治療が終わる頃には服装が明るくなったり、髪型が変わったりされる方もたくさんいらっしゃいます。カメラを向けると自然と笑顔がこぼれるのを見ると、価値観は人それぞれであり、治療に関われてよかったなと感じます。

形成外科では「身体に生じた欠損や奇形などの整容的な問題に対して機能的にも形態的により正常に近づける」ことを目標として診療を行いますが、「正常に近づけること」と「より美しくすること」を線引きすることは難しいです。例えば、保険診療上の眼瞼下垂症では「瞼の開きを良くする」という機能的な改善が一番の目的ですが、切開線がそのまま重瞼線となるので事前のカウンセリングで二重幅をどのくらいに設定するのかを患者さんとじっくり話し合います。年齢や性別だけでなく、患者さんの希望も確認し、最終的に整容的にも満足が得られるように手術を計画します。つまり実際には美容医療との「境界」はなく、むしろ「濃淡」であると私は思います。形成外科の道を進んでまだ一年と少しですが、診療を行う上でより良い結果を得るためには美容医療の知識や技術も必要不可欠であると感じています。

形成外科の対象疾患は体表全てで、特定の臓器を治療するわけではありませんが、あえて臓器を当てはめるとしたら「顔」であると言われています。実際の診療でも顔面に関わる疾患がとても多く、病変の程度も悩み方も人それぞれです。顔の手術を受けた自分が形成外科に進み、今治療する側に立っている、これはきっと何かの縁なのかもしれません。自分の経験を通して、同じように悩んでいる患者の助けになってあげられるよう、これからも日々研鑽を積んでいきたいと思います。